漢法苞徳塾資料	№. 511
区分	入門講座
タイトル	**入門講座　課目の要点覚書**
著者	八木素萌
作成日	1990 年度用

☆オリエンテーション

塾名・塾長経歴他・塾５項目・塾運営（カリスマ不要・役割分担・月例会・部会・その他）

☆漢法医学概論

イ）・特有の表現・臓腑概念は一連の生理的機能の集合

・論理学としての弁証法

・ニューロコンピューターの「並列分散処理モデル」の「認識の表現は多数の構成単位の集団としての活動パターンそのものであり、また、計算では、シナプスを媒介してあるパターンから別のパターンへ、パターンを変換している」「神経ネットワーク・モデル（コネクショニスト・モデル＝並列分散モデル）は、むしろ、神経組織をもつ生物のように、多くの実例から共通性を抽象し、一般化して、新しいケースに対応することができる。その学習能力の鍵は、シナプスに相当する重みが、少しずつ修正される点にある。」それは「たとえば、ソナーのエコーから、岩と金属とを区別するように訓練することができる」フォンノイマン式と「最も相違することは、脳は並列処理機であり、多くの相互作用を、多くの異なるチャンネルで同時に行っているのである。」（Patricia Smith Churchland―カリフォルニア大学サンディエゴ校の哲学科教授～翻訳―松下充彦＝サイエンス　1989.9 日本版より）という点と、帰納的・集約的・推論的・類推的・弁証法的・集合論的な漢法医学の思考形式に慣れる必要性

・動態構造論的平衡の考え方

・三才思想

・養生論

・等々

ロ）・種々の生理的機能単位の集合のセットとしての五臓論

・動態構造論的平衡の回復＝健康の回復

・五行集約の方法・全体的な構成

・治療手段の体系

・経絡論と病位論

・病因と五臓生理の関係論

☆用具手技論

・ツボとは何か
・ツボの手触り
・ツボの天地人
・手を作るための道具と訓練法
・手の手入れとその為の品
・経や穴が触知できる手とは
・用具の手入れの為の品
・刺鍼訓練道具
・日常訓練
・その他

☆病因論概論

・外因・内因・不内外因、外因の示す病症の基本タイプ
・外因の五行性と五臓の五行との共鳴
・病因病臓関連と予後（五邪・大過不及・季節及び時間）
・七情の五行と内傷（内因）病
・内傷病の発現機構
・不内外因（飲食・労倦・房傷とその他の虫獣咬刺傷・刀剣槍銃傷・湯火熱傷その他）
・体質論
・その他

☆病因論各論

・1989 年の病因病機論の訳文から要約整理してテキストを作成する
・内因の発病機転について特に飲痰瘀火論を記述する
・不内外因論を展開する

☆診断学概論

・1989 年度テキスト診断学①を用いる

☆虚実論

・実は邪実・虚は正気虚
・三虚三実論
・補瀉決定の拠所
・その他

☆補瀉論

イ）・難経の補瀉論＝陽気を加え押し入れるのが補・陰気を引き上げ或いは体外に捨てるのが瀉
・取穴の補瀉（＝迎隨の補瀉）と手技の補瀉の厳格な結合
・内経の補瀉論
・鍼灸大成の補瀉などの後世の追加
・灸論
・その他

ロ）・押し手・刺し手
・前後に柔捻
・催気と輸気
・現代基本手技
・古法十四手技
・管鍼
・撚鍼
・振り子鍼
・皮内鍼
・灸頭鍼
・円鍼
・打鍼
・九鍼論
・接触鍼と刺入鍼
・穴の開闔
・その他

☆病症と病機概論

・発病の機構と契機
・臓病病症
・六因の病機病症
・病症病機論における経脈臓腑
・その他

☆蒙色論

・色の基本的な意味
・部位の意味
・十則
・神気を診る
・主客を診る

・尺膚診や舌診・腹診との関連
・瀉血の反応形
・その他

☆撮診と圧診

・腹診・切経診・背候診との関連性
・圧の程度
・経を指に引っ掛けられる感覚の訓練
・岡部の『鍼灸治療の真髄』の記述
・その他

☆尺膚診・背候診

イ）・背候診は色・形・皮膚・棘突起間の診
・肩甲骨の診
・仙骨の診
・項部の診
・その他

ロ）・尺膚診は『難経』の記述を中心に説明
・関連する内経の記述を参照

☆舌診論

・『中医入門』の「舌診」を新たに翻訳して用いる。説明を舌診表と紐づける

☆六経辨証

・「六経辨証の基本的な事柄」を用いる。「辨証一覧表」で説明する

☆衛気栄血辨証

・「辨証一覧表」を用いる。温病論と傷寒論の関係・衛概念・気概念・栄概念・血概念等の説明

☆三焦辨証

・元々の「三焦」概念と温病の「三焦」概念
・温病論的な三焦辨証の意味
・「辨証一覧表」による説明

☆五臓辨別

・五行と五臓
・五臓病証と病因辨別
・脈・背・要穴・九竅・八虚・その他による辨別

☆飲痰瘀辨証

・「飲」「痰」「瘀」の整理、病理、病証、辨証上の要点

☆八虚診

・腹診、切経診とともに実技を兼ねて説明

☆腹診と切経診

・『腹診』『経絡について』を用いて枢要点を説明
・経絡別（正経・奇経）に主要な圧診点を示す
・腹力、臍部、少腹の診

☆脈診論

イ）・実技と並行する。格好よりも正確に認識・触知できることを重んじる

ロ）・『簡易化した経絡治療』『脈診図の記入・他』『難経の脈論』などを合わせ用いる

ハ）・脈状診が中心であること。補瀉の決定は病症の虚実に従うこと

☆要穴表解説

・『臓腑虚実補瀉表の解析』『鍼灸医術の門』『六十九難について』を用いて説明

☆要穴論

イ）・要穴論と並行して説明。『経絡について』『腹診』も用いる

ロ）・五行穴の他の重要穴を説明。圧診点として重要なものも説明

☆経絡学

・『経絡について』を元に、臨床的に有用なように組み立てて説明

☆予後判断論

・種々の伝病論を紹介。これを通じて予後判断の基本点を考察する
弾踝診・喉嚨診・皮肉診・腹力診などの抗病力の観察

☆臨床概論

・臨床の流れ
・患者に接する上での注意事項
・気配を診る
・指導
・その他

☆治則論

・一般的治則とそれの鍼灸に用いる場合と食養
・運動保健法などを原理的に説明

☆灸の適不適

・『灸の適不適について』を用いる
・不足分を内経と灸経から説明
・灸の熱痛に対する反応の個人差
・化膿問題
・その他

☆選経配穴原理論

イ）・主治経の決定
・基本治則に応ずる取穴法と選択手技の問題
・病因に対応する取穴と手技
・本治法と標治法の問題
・外感病と内傷病の治法の相違
・特殊穴の問題（四宗穴・八会穴・八宗穴・重要交会穴・重要特効穴ほか）
・絡鉄（燔鍼）と刺絡（瀉血）と穴の問題
・など等を焦点に説明

ロ）・『経絡について』『配穴原理について』を用いる

☆漢文の読み方

・医籍の膨大な量
・日本での古典医籍の記述形式と量に対して、現代日本語に翻訳されているものは、余りにも僅かなものである
・読み下し文は「直訳」文
・読み下し符号について
・先人の読み下し注解に先ず慣れ親しむこと

・最低限備えておく必要がある辞書
・その他

☆臓象学概論

イ）・色体表その他の診察を可能についているものとしての、具体的な生理的病理的な反応を的確に知るための知識及び理論としての『臓象学』を、極力多面的にアプローチする

ロ）・テキストを作成

ハ）・色体表
・臓象論とは
・五輸八廓学説
・五臓別の臓象（形・色・臭・声・音・液・その他）
・季節と臓象
・その他

☆治療―痛み

・痛み治療の基本
・痛形の診定
・痛形に応ずる処置
・その他

☆治療―肩

・所謂肩凝り―血虚・気虚・瘀血・痰・燥・労・湿・風寒・その他
・所謂五十肩―運動域の判定
・主な着眼点
・内臓反応の肩痛

☆治療―手足

・肘・手首・手指・足首・足甲・踵・足底・脛・脹脛・腿（前側・外側・内側・後側）など

☆治療―腰

・『素問』刺腰痛第 41
・山下九三夫氏のパターン化
・『素問』刺腰痛第 41 以外の指摘
・その他

☆治療―膝

・『素問』骨空論第 60 の膝痛に関する記述を土台に説明

☆治療―飲痰瘀

・飲の病理に応ずる治療
・痰の病理に応ずる治療
・瘀の病理に応ずる治療として説明

☆運動診ほか

・『霊枢』経脈第 10、『素問』刺腰痛第 41 ほかに散在する記述の整理を目指す
・研究課題として明示する
・臨床応用への道標提示

◎膨大な漢法医学の体系であるから、短期間に基本的なことの全体をマスターできるものではない。中国での中医師は 6 年の養成期間である。日本での鍼灸学校の教育は高等中医学院の 1 年に相当しているかどうかと言う程度であろう。そこで当講座では

a. 全体的に展望が開けた感じが持てた
b. 今後の自己研鑽の方向性がある程度意識できた
c. 腰を据えてやっていこうと思った
d. 未解明の分野に漢法家としてチャレンジしよう
e. 塾の趣意を広めよう

等の意識が形成されれば、入門講座の目的は達成されたと言えよう。